

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On tense of Japanese stative predicates modifying nouns

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 嘉一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/502

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



名詞修飾状态的述語のテンス

福 田 嘉一郎

はじめに

名詞修飾述語のテンスは、主節述語の時との関係において複雑な現れ方を
する。すなわち、主節述語の時を基準とする相対テンスをとる場合と、発話
時を基準とする絶対テンスをとる場合とがある。本稿では、特に多様な要素
がかかわると見られる状态的述語のテンスを中心に考察する。

1. 名詞修飾述語の相対テンスと絶対テンス

名詞修飾述語は、主節述語の時¹（主節時）を基準とする相対テンスをとる
場合が多い。相対テンスでは、名詞修飾述語の非-タは、述語の時が主節時
以後（相対的未来）または主節時と同時（相対的現在）であることを示す。
主節時が発話時以前（過去）であるとき、非-タの名詞修飾述語は過去、発

1 筆者は福田 2002, 福田 2005 において、テンスの根拠となる時は述語が表す事態の時（事態時）ではなく、ある時に、事態の現場に話者自身がいれば、事態についての直接情報を取得する（事態を観察する）可能性があると話者が考える（または実際に観察した）その時、すなわち述語事態の観察（可能）時であると主張した。本稿の「述語の時」はこの観察（可能）時を指す。述語の時が発話時以前（過去）（(i a), (ii a), (iii a), (iv a)）の場合は-タ（タを伴う形）をとり、述語の時が発話時以後（未来）（(i b)）または発話時と同時（現在）（(ii b), (iii b), (iv b)）の場合は非-タ（タを伴わない形）をとる。

(i) a. 娘はこの着物を成人式の時に着た。

b. 娘はこの着物を成人式の時に着る。

(ii) a. 彼女は着物を着ていただろう。

b. 彼女は着物を着ているだろう。

(iii) a. きょうは寒かった。

b. きょうは寒い。

(iv) a. 彼は去年はもう大学生だったそうだ。

b. 彼は大学生だそうだ。

話時と同時（現在）、発話時以後（未来）のいずれの事態をも表すことがある。

- (1) a. 葬儀の翌日、清子は東京へ帰って行く春彦の勤先の会社の人たち数人を駅へ送って行った。（井上靖『ある落日』）
b. 彼女は大学を卒業する年に、就職を小杉に依頼するために上京した。
c. 資金を融通してくれる人にきのう会った。
(2) 公園で遊んでいる子供たちはみな元気そうだった。
(3) 清子は汽車で3時間ほどのM市にある大学に通っていた。
(4) きのう激しい雨が降った。
(5) 川口は軍需工場の会社を3つ経営していた。

名詞修飾述語が動詞的述語の場合（(1)）、非・タは述語の時が相対的未来であることを示し、名詞修飾述語が状態的述語の場合（(2)-(5)）、非・タは述語の時が相対的現在であることを示す。(1a, b), (2), (4), (5)の名詞修飾述語は過去の事態を表しているとしか解釈されない。(1c)の名詞修飾述語は未来の事態を表していると解釈されやすいが、過去の事態を表しているという解釈も否定できない（「会ったその場で融通してくれた」等）。(3)の名詞修飾述語は、当該の事態が発話時まで続いていれば現在の事態を、続いていなければ過去の事態を表していることになる。

(1)-(5)の名詞修飾述語の時を過去と解釈して、それらの述語に発話時を基準とする絶対テンスを与えると、(1')-(5')のようになる。

- (1') a.* 葬儀の翌日、清子は東京へ帰って行った春彦の勤先の会社の人たち数人を駅へ送って行った。
b.# 彼女は大学を卒業した年に、就職を小杉に依頼するために上京した。
c.# 資金を融通してくれた人にきのう会った。

(2') 公園で遊んでいた子供たちはみな元気そうだった。²

(3') 清子は汽車で3時間ほどのM市にあった大学に通っていた。

(4') *きのう激しかった雨が降った。

(5') ?川口は軍需工場だった会社を3つ経営していた。³

名詞修飾述語が動词的述語の場合 ((1')), (1) の名詞修飾述語と同じ意味を表そうとするなら不適格である。通常, (1' b, c) の名詞修飾述語の - タは相対テンスによるものと見なされ, 述語の時が主節時以前 (相対的過去) であることを示していると解釈される。⁴ (1' a) については, 名詞修飾述語の時と主節時との関係から, (1' b, c) と同様の解釈が許されない。いずれにせよ, 主節時が過去で名詞修飾述語の時がそれより前であるとき, 名詞修飾述語は相対テンスでも絶対テンスでも - タをとるほかない。

一方, 名詞修飾述語が状态的述語の場合, (2'), (3') のように (2), (3) との意味の違いが微妙な例と, (4'), (5') のように非文法的な例とがある。そのため, あるときは相対テンスと絶対テンスの両方を取りえて, あるときは相対テンスしか (または絶対テンスしか) とりえない理由は何かという問題, また, 両種のテンスを取りうる時, 意味の違いはあるのか否か, あるとすればどのような違いかという問題が生じて来る。

2. 名詞修飾状态的述語のテンスに関する先行研究

2.1 Josephs 1972

Josephs 1972 は, 名詞修飾述語が表す動きが主節時において存在する場合でも, 名詞修飾述語の - テイタには主節時との非同時 (non-simultaneous)

2 寺村 1984 は非文法的と判定する。

3 寺村 1984 は許容可能と判定する。

4 三原 1992 は, 主節時が過去で, - タの名詞修飾述語が主節時以後の過去の事態を表す (v), (vi) のような例が認められることから, (1' b, c) の名詞修飾述語の - タを絶対テンスによるものとする。なお, 注 8 参照。

(v) 越前海岸で自殺した女性はそこへ行くのにタクシーを使った。

(vi) 富山市は昨年まで城跡公園にあった合掌造りを 10 年前に白川郷から運んで来た (という話だ)。

の意味があるとし、(6b)、(7b)が、名詞修飾述語の動きに主語人物（話者）が主節時以前から（主節時においても）注意を向けていたことを含意するのに対して、(6a)、(7a)の - テイルはそのような「以前からの観察（previous observation）」の意味をもたないとしている。

(6) きのう電車の中で、私は大声で {a. 歌っている／ b. 歌っていた}
学生たちを怒鳴りつけた。

(7) 私は電車の中で、傘を {a. 持っている／ b. 持っていた} 人に話
しかけた。

また Josephs は、名詞修飾述語の - テイルを、それが表す動きと他の動きとの「収束（convergence）」を表現するものととらえ、その仮説を支える例として、(8b)は主節述語が状態（名詞修飾述語の動きと全体的に同時 <totally simultaneous>）を表すため通常は不適格であるが、他の動き「着くと」を加えた (9) の - テイルは適格になるという事実を示している。⁵

(8) 太郎が {a. 読んでいた／ b. #読んでいる} 本はシェークスピア
だった。

(9) 私が着くと、太郎が読んでいる本はシェークスピアだった。

2.2 寺村 1984

寺村 1984 は、(10) と (11) のような例を比較する。

(10) 当時、清子は六十近い母親のさいと、その年 {a. ^[原文]小さい／ b. *
小さかった} 医院の看板を掲げた三十歳の長兄の辰也と、三人で郷
里の甲府の街に住んでいた。 (『ある落日』)

(11) 太郎は昔、大阪の梅田駅前のホテルへ、父と泊りに行き、部屋が
ないと断われはしなかったが、前金をとられたことがあった。そ
れは父子が二人とも、やや薄汚れたアノラックを着て、手に小さい

5 (2) のような例が適格であることについて Josephs は、主節述語が意味のうえでは状態を表さず、話者主語が到着した時の最初の印象あるいは発見に言及しているという事実によるものと推測している。

カバンを一つ持っていただけだったからである。

《ねえ、ホテルっていうものは、いつも先にお金をとるの?》

まだ {a. ^[原文] 小さかった / b. * 小さい} 太郎は訊いた。

(曾野綾子『太郎物語』)

(10) の「小さい医院」は、「大きい医院」「立派な医院」など、さまざまな医院があるなかの1つを限定している。それに対し、(11) の「小さかった太郎」は、「現在の太郎」「高校生の時の太郎」など、さまざまな時の太郎のなかから1つを取り出す限定である。寺村は、被修飾名詞の指示対象を他のものと比べて区別する (10a) のような特徴づけを「純粋な装定」、被修飾名詞の指示対象をそれ自身の他の時の状態と比べて区別する (11a) のような特徴づけを「述定を兼ねた装定」と呼び、これらの性格の相違が名詞修飾述語のテンスにかかわる決定的な要因であると結論する。すなわち、名詞修飾述語が純粋な装定の場合は相対テンスをとり ((2), (4)), 述定を兼ねた装定の場合は絶対テンスをとるということである。そして、両種のテンスをとりうるのは、文脈上いずれの装定も可能な場合であり、聞き手は、名詞修飾述語が相対テンスで現れたとき ((3), (5)) は純粋な装定の意味に解釈し、絶対テンスで現れたとき ((3'), (5')) は述定を兼ねた装定の意味に解釈するとしている。

2.3 先行研究の問題点

2.3.1 Josephs 1972 は、名詞修飾述語が動きを表す動詞の - テイル / - テイタである場合について主に論じており、名詞修飾述語が状態動詞、形容詞、名詞 + 指定詞などの場合については、相対テンスをとると述べるにとどまっている (“...the nonP [=non-Past] forms in the RC [=Relative Clause] simply indicate that the state in question was in existence at the time-point of the MxS [=Matrix Sentence] verbal...and the P [=Past] forms unequivocally assert that the state in question had ex-

isted and come to an end before the time-point of the MxS verbal.”)。しかし、(3’), (11) の名詞修飾述語「あった」「小さかった」が表す事態は主節時においても存在し、それらの - タが文法的である理由は、事態の時を根拠とした相対テンスでは説明できない。

2.3.2 寺村 1984 が挙げる例 (10) の「六十近い」「三十歳の」⁶は、相対テンスによって非 - タをとった名詞修飾述語（相対的現在、主節述語は「住んでいた」で主節時は過去）であり、純粋な装定と解釈されることになる。ところがこれらの場合、被修飾名詞（句）「母親のさい」「長兄の辰也」が定（Definite）に相当する。このような名詞修飾述語は、被修飾名詞の指示対象を他のものと比べて区別する特徴づけとは考えられない。

3. 両種のテンスの出現条件

3.1 相対テンスと絶対テンスの選択

3.1.1 次の (12)-(14) のような場合、名詞修飾述語が相対テンスをとるのは不自然である。

(12) ? 私は後ろに立っている男にいきなり殴られた。

(13) ? かばんの中にある時計が鳴りだした。⁷

(14) ? 私は明かりを消して、彼女の白い肩に触れた。

(12)-(14) では、名詞修飾述語が表す相対的現在の事態（「＜男が私の＞後ろに立っている」「かばんの中に＜時計が＞ある」「＜彼女の肩が＞白い」）を、話者が主節時において（事態の存在は知っていたとしても）意識に上らせていたととらえることが難しい。(12), (13) は名詞修飾述語が絶対テン

6 寺村 1984 は「六十近かった」「三十歳だった」も許容可能と判定する。しかし、(10) は物語の状況を設定する文であり、話者は登場人物の「清子」ではなく語り手自身ととれる。名詞修飾述語の相対的現在の事態「(清子の母親のさいが) 60 近い」「(清子の長兄の辰也が) 30歳だ」を、話者は主節時（物語時）に意識していたととらえられ、それらの事態を物語の背景として述べる役割をこの文は果たしている。3.1.1 参照。

7 文全体が意図された事態を表しているなら適格である。

スをとれば文法的となる。⁸

(12') 私は後ろに立っていた男にいきなり殴られた。⁹

(13') かばんの中にあった時計が鳴りだした。

裏返って、名詞修飾述語の相対的現在の事態を、話者（物語では語り手、または語り手が視点を寄せている登場人物）が主節時に意識していたととらえるのが自然、あるいはそのようにしかとらえられない場合、名詞修飾述語は相対テンスをとり（述語の時も相対的現在）、絶対テンスは非文法的である。¹⁰

(15) 私は {a. 笑っている／ b. *笑っていた} 彼女が好きだった。

(16) 私は錨の柄が {a. ある／ b. *あった} ネクタイを買った。

(17)きのう {a. 激しい／ b. *激しかった} 雨が降った。

(18) 辰也はその年 {a. 小さい／ b. *小さかった} 医院の看板を掲げた。

(19) 私は彼女の {a. 白い／ b. *白かった} 肩に触れた。

(20) 川口は {a. 軍需工場の／ b. ?軍需工場だった} 会社を 3 つ経営していた。

3.1.2 名詞修飾節に過去の時を表す副詞類があり、名詞修飾述語の事態を話者が観察した場合は、名詞修飾述語の時が主節時とかかわりなく過去に固定されるため、義務的に絶対テンスをとって - タとなる。

(21) [その時公園で {a. 遊んでいた／ b. *遊んでいる}] 子供たちは

8 (11) の話者は、物語の語り手が視点を寄せている「太郎」ととれる。名詞修飾述語の相対的現在の事態「(自分が) まだ小さい」を、「太郎」が主節時に意識していたはずはないため、絶対テンスをとった (11a) が文法的となっている。

また、名詞修飾述語が動詞の述語の場合も同様と考えられる。(v) の名詞修飾述語は相対テンスをとることができない。

(v') *越前海岸で自殺する女性はそこへ行くのにタクシーを使った。

名詞修飾述語の相対的未来の事態「(女性が) 越前海岸で自殺する」を、話者が主節時に意識していたととらえるのはほぼ不可能である。

9 名詞修飾述語の事態に話者が主節時においても注意を向けていたとする、Josephs 1972 の説明はあてはまらない。

10 (15)-(20) ではたらいっている規則は、(vii), (viii) の場合と同じ性質のものと考えられる。

(vii) そのうち私は主人が誰かと話している声を階下のほうに聞いた。(辻邦生『風座』)

(viii) 小杉は初め清子の立っている姿にひどく驚いたらしかなかった (『ある落日』)

みな元気そうだった。

- (22) 「太郎がきのう {a. 読んでいた／ b. *読んでいる}」本はシェークスピアだった。

3.2 相対テンスと絶対テンスの両立

3.2.1 3.1.1 を逆に考えると、名詞修飾述語が相対テンスと絶対テンスの両方を取りうる場合、相対テンスをとっていれば名詞修飾述語の相対的現在の事態を話者が主節時に意識していたと解釈できることになる。

- (23) 公園で {a. 遊んでいる／ b. 遊んでいた} 子供たちはみな元気そうだった。

- (24) 私は電車の中で、傘を {a. 持っている／ b. 持っていた} 人に話しかけた。

- (25) 太郎が {a. 読んでいる／ b. 読んでいた} 本はシェークスピアだった。

- (26) きのう電車の中で、私は大声で {a. 歌っている／ b. 歌っていた} 学生たちを怒鳴りつけた。

(23a) については、「(子供たちが) 公園で遊んでいる」という相対的現在の事態を根拠に元気そうだと判断したように解釈され、(24a) については、「(その人が) 傘を持っている」という相対的現在の事態を理由に (たとえば、地下鉄構内で地上の天候を知りたい) 話しかけたように解釈される。また (25a) については、「太郎が (本を) 読んでいる」という相対的現在の事態に興味を覚えて観察したところ、その本がシェークスピアだとわかったように解釈される。名詞修飾述語の事態が主節時において新しい情報でなかった場合¹¹や、名詞修飾述語の事態を話者が主節時より後で初めて観察した場合は、名詞修飾述語の相対テンスは不自然である。

11 そのような場合に (15)-(20) は現れない。とりわけ (15) では、主節時における情報の焦点が名詞修飾述語の事態に置かれている (「<彼女が他のことをしているのではなく>笑っている」)。

(23') 公園と駐車場で子供たちが遊んでいた。公園で {a. 遊んでいた
／ b. ?遊んでいる} 子供たちはみな元気そうだった。

(24') 電車の中に、傘を持っている (*持っていた) 人と野球のバットを持っている (*持っていた) 人がいた。私は傘を {a. 持っていた
／ b. ?持っている} 人に話しかけた。

(24'') 私は、「この人は傘を持っていないだろう」と思い込んで、傘を {a. 持っていた／ b. *持っている} 人に話しかけた。

(25') 太郎と次郎が本を読んでいた。太郎が {a. 読んでいた／ b. ?読んでいる} 本はシェークスピアだった。

(26) の場合は、名詞修飾述語の事態が主節時において存在したとすれば、その事態を話者が主節時に意識していなかったとは考えられない。¹²(26) では、主節時における情報の焦点が名詞修飾述語の事態になく、話者が名詞修飾節事態を主節時に初めて観察したのでもない。

3.2.2 (3) と (3') に 3.2.1 の解釈を適用すると、(3') の場合、名詞修飾述語が絶対テンスをとっているの、名詞修飾述語の事態を話者が主節時に意識していなかった、すなわち、事態は存在したが意識に上らせていなかった(事態を知らなかった場合を含む)、または事態が既に存在しなかったということになる。しかしながら、いずれの解釈も実際には不適當である。

(3'') M 市とN 市に大学があった。? 清子は汽車で 3 時間ほどの M 市にあった大学に通っていた。

(3''') ? 当時はどこにあるか知らなかったのだが、清子は汽車で 3 時間ほどの M 市にあった大学に通っていた。

(3''') * 当時は他所に移転していたのだが、清子は汽車で 3 時間ほどの M 市にかつてあった大学に通っていた。

12 (23b), (25b), (26b) について、当該の事態が主節時より前に終わっていたとする解釈は可能である。名詞修飾述語は相対的過去でも絶対的過去でも - タをとることになり、形態上の区別がない。

(3) の名詞修飾述語が表す相対的現在の事態（「＜大学が清子の家から＞
 汽車で 3 時間ほどの M 市にある」）は、発話時において存在するとも存在し
 ないとも解釈できる。当該の事態が発話時において存在する場合、「ある」
 という非 - タは相対テンスによるものか絶対テンスによるものか、形態上の
 区別がつかない。¹³ 福田 1996 で述べたように、(3') の「あった」は、(27b),
 (28b) の名詞修飾述語の - タと同様に、発話時における事態の非存在（大学
 が現在は M 市にない）を明示するために絶対テンスをとっていると考えら
 れる。

(27) a. 太郎は日本語ができない女性と結婚した。

b. 太郎は日本語ができなかった女性と結婚した。（現在は日本語
 ができる）

(28) a. そのころ花子はドラマーの男とつきあっていた。

b. そのころ花子はドラマーだった男とつきあっていた。（現在は
 ドラマーではない）

今後の課題

(14) では、名詞修飾述語の相対的現在の事態を、話者が主節時に意識し
 ていたとはとらえにくい。しかし、名詞修飾述語が絶対テンスをとった
 (14') は更に許容量が低い。

(14') * 私は明かりを消して、彼女の白かった肩に触れた。

(12), (13) の「立っている」「ある」と (14) の「白い」との相違には、
 益岡 2000 の提示する叙述の類型（「属性叙述」と「事象叙述」）の問題がか
 かっているものと思われる。寺村 1984 の「純粋な装定」「述定を兼ねた
 装定」との関係も含めて、考究を続けたい。

(2009/09/30)

13 「当時はどこにあるか知らなかったのだが、清子は汽車で 3 時間ほどの M 市にある大学に通っ
 ていた」の「ある」は、名詞修飾述語の事態が発話時においても存在するなら、絶対テンスに
 よる非 - タとして許容される。

参考文献

- 岩崎卓（1998）「連体修飾節のテンスについて」, 国立国語研究所 編『日本語科学 3』 pp.47-66, 国書刊行会.
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 福田嘉一郎（1996）「近代語の時の表現―連体法述語の場合―」『国語国文』 65-5, pp.492-510, 京都大学.
- 福田嘉一郎（2002）「現代日本語の静的述語のテンポラリティについて」『神戸外大論叢』 53-7, pp.23-42, 神戸市外国語大学.
- 福田嘉一郎（2005）「現代日本語の動的述語のテンポラリティについて」『神戸外大論叢』 56-6, pp.1-10.
- 益岡隆志（2000）「属性叙述と事象叙述」『日本語文法の諸相』 pp.39-53, くろしお出版.
- 三原健一（1992）『時制解釈と統語現象』くろしお出版.
- Josephs, Lewis S. (1972) Phenomena of tense and aspect in Japanese relative clauses. *Language* 48-1, pp.109-133, The Linguistic Society of America.